

〔特集〕 I

ビジネスについて考えてみる〈プロローグ〉

The Study of "Business"

今回、特集としてビジネスモデルが採り上げられることになった。この数年の流行となっている研究テーマといってもよい。そこでここでは、まずビジネスについて考えてみることにした。ビジネスという言葉が何を指し、何を意味しているのかについて語ることもビジネスモデルを検討し、研究するについて必要と考えたからである。

多くの読者は、ビジネスの言葉は遠く幼い頃より使い、わが国でも日常語であるから、今更、とやかく論ずることもあるまいと言うことであろう。しかし、辞書を引いてみてみよう。たとえば、研究社の「新英和中辞典」を引いてみると①事務、業務、仕事、……②商売、商業、事業……③取引、売買……④店、会社……⑤用務、用事……⑥やるべき仕事、職務……等々のことが記載されている。

そこで次のような考えが浮ばないであろうか。この語は、ある範囲で使われているが、意味はいくつもあり、どの意味に使われているか分かりにくい。何故、このようなことになったかを、特に、経済、経営の立場で考えてみる必要がある、という考えが湧き出てこよう。ということから、一つの方法として、語源からその意味の発展を尋ねてみることを思いつく。院生ならこの程度のことはしよう。角川書店の「外来語辞典」(昭・43)を参照した学生がいた。それを読むと、わが国で最初にこの語を翻訳した人は福沢諭吉ではないかということが推測される。『帳合之法』(卷之三)1873、にビジネスを商売と訳すとある。また夏目漱石(『滑稽文学』や坪内逍遙(『柿の帯』)にもビジネスが使用されているとある。下って、1955年、岡倉古志郎は、『財閥』の中で「戦争は最高のビジネス」とある記述にも目を引かれる。というのは、明治の時代から発展して昭和の時代となると戦争と関連してビジネスが使われている点である。そして平成の今日である。

この推移の中に一つは、ビジネスの本質を握むものもいようし、二は、社会や経済の発展過程で、ビジネスの内的変化と、そして外的変化の何たるかを思考するものもいよう。ここまで、院ではどのように指導し、研究づけをしているのであろうか。

さて、角川では、『外来語の語源』(昭和・54)というのものもある。その中に、業務、事務、営業、また仕事、職業などの訳は明治で、昭和になると金もうけのための仕事や行動という意味でも使われるとある。さらに語源的には、勤勉、多忙という意味からの転じたものとも書いてある。“Business”はbusy + nessというぐらひは、大学での講義に出てこようが、それから何を引き出すかが頭の使いどころであろう。たとえば、何故、事務という訳があるのか、意味があるのか、という点もある。経営学書では、この点は、あまり明らかにしていない。

第一、最近の経営学研究や、大学での経営学講義では、“ビジネス”の用語は専門語としては十分に扱われていない。そこにはいくつかの原因があり、流行が存在した。われわれは、今、一度この点について研究の道程を逆上ってみたいと思う。そしてその上で、今日の問題であり、未来的問題である“ビジネスモデル”を論じてみたい。

この作業の前編については、横浜市立大学の齊藤教授と立正大学の奥村教授(横浜国立大学名誉教授)のご両名に願ひした。紹介するまでもなく、お二人は、経営学会で著名な方々である。そこで、現在から未来に向けての経営学の課題についてもお尋ねすることにした。

なお、第43回大会での課題研究グループの主旨にも“ビジネス”についての考えを記述していただいている。基礎的考察として参考として下さい。(涌田宏昭)